慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エンゲルスのロオドベルトス批評（二、完）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.11 (1922. 11) ,p.1563(63)- 1569(69)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221101-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たゞ前述の定義から推すと職業並に所有の區別は階級別の標準とはならない。また經濟的過程の內部において種々な相互關係による地主を有してゐる勞働者の團體また特殊な所有を取つて見ても、それは階級を構成しない。煙草製造勞働者も纖維工業勞働者も同じ經濟的條件の下に、賃銀に對してその勞働を賣り、同じ方法（同じ程度ではないにしても）で餘剩勞働を施行する。企業者團（產業的、商業的並に金融的資本主義）土地所有者に對する彼等の生產的行動から起る階級的地位は同一である。彼等は、これによると同一の利益と對抗とを持つてゐる。

資本家に就いてもこれは同樣である。彼が鑛山、炭坑、煉瓦、煙草製造にその資本を放下してゐても資本家たる地位に就いては同一である。然るに工業家、商品を賣買する商人、貨幣並に兩換によつて生活してゐる銀行家は同一の資本家ではあるが、資本制的經營の內部においては、種々の經濟的機能並に相互關係に基づく異つた地位を持つてゐる。故に資本家階級中の下位の階級として工業家、商業家、金融家を區別することは正しい。工業家は他人の勞働力を購入して、ある商品の生產のための經營にこれを利用し、さうして生產された餘剩價値の中から企業利潤としての彼の配分を取得する。金融家は利子を得てこれに對して資金を融通する。この兩者共資本家であつて、社會的生產過程において生產された餘剩價値からその所得を得る。乍然、この過程における彼等の經濟的機能は異れる種類のもので、資本制的經濟の內部において異れる活動方面を有してゐる。故に彼等の間には利害の不一致が時としてあり得るのである。

階級區別の標準として職業が用をなさないやうに資產の大小、所得の大小もまた用をなさない。人はよく云ふ。ある農民または手工業者の收入並に生活關係はよい地位の工業勞働者よりも高くはない。故に彼等は勞働者階級に屬すべきものであると。また云ふ。小商人の營業の何ものも彼に屬してゐない。彼は負債を負つて働いてゐるに過ぎない。だから彼もまた勞働者であると。マルクス主義の階級學說はかくの如きことを主張しないのである。かくの如き主張は財產の大小と所得の高低を以て階級別の標準とした舊學說への復歸に別ならない。獨立の農民は高給の勞働者以下の收入を有するが故に賃銀勞働者ではない。彼は資本家に對して何等の賃銀關係を結んでゐない。餘剩勞働も利潤をも生產してゐないのである。これと同樣に落魄した貴族または官吏は彼の收入が通常の勞働者の收入以下に下るからと云つて決して賃銀勞働者ではないのである。要するにマルクス主義においては職業別財產の差異、所得の高低を以て階級別の標準とはしない。マルキシズムに從へば階級は經濟的發達の過程における產物で、當時の經濟組織から發生する共同利害の所產である。然らば、階級は如何にして發達したか。これが次の問題である。（Cunow. A. a. O. Ss. 55-56）

（未完）

エンゲルスのロオドベルトス批評（二完）

小泉信三

ロオドベルトスは謂ふ、

第二の條件に就て云ふと、券面に證明せられてゐる價値が實際に交易上に存在するやうにす

る爲めには斯う云ふ仕組を設ける。即ち實際に一生產物を交附した者のみが其生產物を造る爲めに費やした勞働量を精確に記入してある紙劵を受取るやうにする。二日の勞働の生產物を交附したものは「二日」と記入してある紙劵を受取るのである。發劵に當つて此規則を嚴守することに依て、必然此の第二の條件も滿たされなければならぬのである。蓋し吾々の前提に從へば、財の實際の價値は常に其製作に費された勞働量と一致し、而して此勞働量は普通の時間單位を其尺度とするものであるから、苟も二日の勞働のそれに投せられてある一生產物を交附した者が、二日の證明劵を受取るならば。彼れは正に己れが給付した丈けのそれ以上でも以下でもない價値を收得する譯であるし、又實際に一生產物を交易に提供した者のみが斯る證明劵を受領するのであるから、劵面に記入せられた丈けの價値が社會の需要滿足の爲めに存在することも亦確實である。此規則を嚴守すれば、現存の價値額と、證明せられたる價値額とは正確に一致する。然るに證明せられた價値額は正に指定せられた價値額と同一であるから後者は必然現存價値と一致し、一切の要求は充足せられ、決濟は正しく行はれざるを得ないのであると。

ロオドベルトスは今迄何時も其新發見に於て立ち遲れの不幸に逢つて來たが、今度こそは少くも一種の獨創と云ふ、功績を擧げ得たのである。彼れと同じく勞働貨幣のユウトピヤを說く競爭者の中にもそれを此のやうな單純幼稚な云はゞポメラニヤ的形式を以て說くことを敢てした者は誰れもないのである。元來今日の資本的社會に於ては、工業資本家は皆自己の判斷に從つて、其の欲する物を欲する方法、欲する數量に於て生產する。社會の需要は彼れに取つては未知量である。それにも拘らず結局何うにか需要が滿たされて、大體に於て生產が需要ある物に向けられると云ふのは何うして行はれるのかと云へば、それは競爭に依て行はれるのである。即ち種類若しくは數量の上で時の社會的需要に超過して生產せられた商品は、失價して勞働價値以下に下るといふことに依て、間接に生產者をして、無用なる若しく必要以上なる商品の生產せられた事を感知せしめるのである。そこでこれから二つの結論が生ずる。

第一は商品價格が絕えず商品價値から離反するといふことは、商品價値を實現せしむるための必要欠く可からざる條件である。と云ふことである。競爭並に之と共に商品價格の動搖と云ふことに依てのみ商品生產の價値法則は貫徹される、社會的必要勞働時間に依ての價値の決定が現實の事實となるのである。尤も其場合に價値の表現形態たる價格は價値とは其稍々異がつた外觀を呈することにはなるが、これは獨り價値に限つたことではなくて、大多數の社會的關係の免れ難き運命である。其處で今ロオドベルトスのやうに、互に交換に行ふ商品生產者の社會に於て、勞働時間に由る價値決定を、競爭を廢することに依て、實現しようとするのは例に由て例の如き經濟法則の無視を證明するものに外ならぬ。勞働時間に由る價値決定の實現といふことは、競爭の價格壓迫といふことより外に之を行ふ方法はないのである。

第二に競爭は相互間に交換を行ふ商品生產者の社會に於て價値法則を實現せしむるところの競爭は、また一に其事に依て社會的生產の秩序と組織とを可能ならしめるのである。生產物の失價若しくは增價に依てのみ商品生產者は社會が何を幾許要し、若しくは要せざるかを覺らず

にはゐられなくされるのである。然るにロオドベルトス等の主張するユウトピヤは正に此の唯一の調節者を撤廢しようとする。これを撤廢して何うして各生產物が必要量丈け生產せられ、又必要量以上には生產せられないといふ保障が與へられるか、吾々が穀物と肉との欠乏に苦しんでゐる一方に砂糖と馬鈴薯酒とが有り餘つて困つたり、洋袴の數が足りないのに洋袴のボタンが幾百萬となく生產せられたりすることが何うして起らぬと保障されるかと問へば、ロオドベルトスは意氣揚々として其結構なる計算書を吾々に示す。それに由れば過剩なる砂糖の各封度、賣れぬ薯酒の各瓶、不用なる洋袴ボタン一つ一つに對して正確なる證明書が交附されるのである。即ち嚴密に「正確な」計算それに從へば有ゆる要求が滿たされて、而して決濟が正しく行はれるところの計算書、それを吾々に示すのである。それを信じない者はポメラニヤの政府主金庫年金局計算官で、此計算書を檢査して間違なしと認めた、間違のないXに申出ればいゝのである。

次にロオドベルトスが其無邪氣にも其ユウトピヤに依て工業上及び商業上の恐慌を防遏しようとする其無邪氣さ加減を見て貰ひ度い。抑も商品生產が世界的市場的範圍で行はれるやうになると、自己の計算に從つて生產を行ふ個々の生產者と、市場との均衡は、世界市場の暴風雨即ち恐慌に依て回復されるであるから、競爭と云ふことが價格の騰落に依て、個々の生產者に世界市場の情況を指示することがなくなれば、個々の生產者は全く目を塞がれたも同樣になるのである。生產者をして、復た再び市場の情況を知らしめないやうにすること、これが實にドクトルアイゼンバルトをして羨望措かざらしむべきロオドベルトスの恐慌病に對する治療法なのである。

さて最後に吾々はロオドベルトスが他の無數の勞働貨幣交換經濟の主張者とは違つた眞に新しいことを云つてゐる一點に到達した。と云ふのは是等の人々はグレエからプルトンに至るまで皆資本に依る賃銀勞働の搾取を撤廢する目的の爲めに此交換制度を要求して居る。各生產者をして其生產物の勞働價値全額を收得せしめようと云ふのである。ところがロオドベルトスは決してさうでないと云ふ。賃銀勞働と其搾取は依然として繼續するのである

第一に勞働者は如何なる社會に於ても其生產物の全價値を收得して消費し得るものではない。常に生產せられた基金の中から、經濟上不生產的ではあるが、併し必要なる幾多の職分を行ふ者を養ふ費用が支辨せられなければならないと云ふ。――併しこれは今日の分業が存續する限りのみ正しい。國民全員が生產的勞働に服する義務ある社會では此事は最早なくなるのである。但し社會的豫備基金及び蓄積基金の必要は依然として存し、從て成程勞働者たる全國民は其生產物總量を所有享受するであらうが、各個人が其「全勞働收益」すると云ふとはないのである。經濟上不生產的な職分を行ふ者を勞働生產物の中から養ふといふことは他の勞働貨幣ユトピストも之を看過しはしなかつたが、たゞ彼等は勞働者をして普通の民主的の方法で此目的の爲に自ら己れに義務を課せしめたのに、ロオドベルトスは全問題の決定を官僚政治の裁量に委し、上から勞働者の己れの生產物に對する得分を定めて之を恩惠的に收得せしめたのである。

第二にロオドベルトスは地代及び利潤をも削減せず其儘に存續せしめようとする。蓋し地主

及び工業資本家も經濟的には不生產的でも社會的には有用若しくは必要なる或職分を行ふものであつて、云はゞそれに對する俸給として地代及び利潤を收めるものであるからと云ふ。一體今日彼等はその行ふ（而かも充分惡しく行ふ）僅かの職分に對して餘りに多くを收得して居るのであるが、ロオドベルトスは少くも今後猶ほ五百年間は特權階級のあることを必要とし、現在の餘剩價値率も依然として存續すべきもので、たゞ今日以上に增進してはならぬと云ふ。此の餘剩價値率をロオドベルトスは二〇〇％と認めて居る。即ち一日十二時間勞働の場合に勞働者は十二時間の證明劵を得ないで、僅かに四時間の證明劵を交附せられ、而して自餘の八時間內に生產せられた價値は地主と資本家との間に分配せられるのである。即ロオドベルトス式の勞働證明は正面から嘘を吐いてゐるのである。これで勞働者が甘じてゐるだらうと思ふのはポメラニヤの地主でなければ想像の出來ぬ事である。が、彼れは勞働者が十二時間働きながら實は四時間しか働かなかつたのだと云はれて音なしく承知してさへ居れば、その代りには今後永久勞働者の彼自身の生產物に對する配當分が三分一以下には下らぬことを保證しようと云ふのである。かうなつては最早これに一言を費やす値打ちもない。即ち勞働貨幣のユウトピヤに於て、ロオドベルトスが新しいことを述べてゐるところでは、此の新しきものは兒戲に類するもので、彼れ以前及び彼れ以後の幾多の同意見者の業作の遙かに下風に立つものである。

ロオドベルトスの Zur Erkenntnis が出た頃の時代に取つてはそれは慥かに重要なる一著作であつた。彼れのリカルドの價値理論の或方向への擴充は前途の見込みの多い發途であつた。此擴充が新しかつたのは彼自身と獨逸とに取つてのみであつたとしても、猶ほそれは大體に於て彼れの優れたる英吉利の先人の業作と比肩し得るものであつた。たゞ併し、それは一個の發途たるに過ぎなかつた。理論に取つての眞の所得を收めようとするには、それから進んで猶ほ根本的批評的な研究を續けなければならぬのであつたが、ロオドベルトスは始めからリカルドオの擴充をユウトピヤへの方向に於て行つたから進步の途は彼自ら之を遮斷したのである。而して之れに依て彼れは沒成心なる批評の第一要義を失つて仕舞つたのである。彼れは豫め定められたる目的に向つて突進した。傾向的經濟學者となつたのである。一度彼のユウトピヤに捉へられたので、彼れは自ら學問上に於ける進步を全く不可能のものにしたのである。一八四二年から其死に至る迄、彼れは一つの處を輪をなして廻轉し其第一作で既に言明したか或は暗示したところの思想を常に繰返しては誤解せられたと感じ剽竊されるものもないのに剽竊されたと感じ、而して最後には根本に於て彼れは既に久しく發見せられてあつた事を再び發見したに過ぎぬと云ふことを認めることを肯んじないのである。（完）

自然的課稅の主張者（二）

金原賢之助

四　パトリック・エドワアド・ドオブ　一八一五―一八七三年

Patrick Edward Dove は一八一五年七月三日蘇格蘭 Edinburgh に近ち Lasswade に生れた。彼は古い著名な蘇格蘭の名門の出であつた。